

小学校の特別支援学級（自閉症・情緒学級）における支援の実際

北九州市立黒崎中央小学校

自閉症・情緒学級担任 小島康浩

I はじめに

黒崎中央小学校は、児童数約570人の北九州の副都心「黒崎」を校区にし、花尾山麓の鳴水扇状地に位置している。平成19年度に北九州市立黒崎小学校と北九州市立陣山小学校を統合し現在に至っている。児童会活動が充実しており、子どもの自主参加による「あいさつ運動」(図1)や各委員会による「集会」活動等が積極的に行われている。特別支援学級の児童も、学校の一員として積極的に参加している。本年度の黒崎中央小学校の特別支援学級(以後 わかば学級)は、自閉症・情緒学級(以後 情緒学級)1クラスと知的学級2クラスから構成されている(図2)。私は、平成26年度より、情緒学級の担任(以後 報告者)として児童の教育にあっている。この報告は、平成27年度に情緒学級において実施した教育活動をまとめたものである。



図1 あいさつ運動



図2 特別支援学級の教育課程

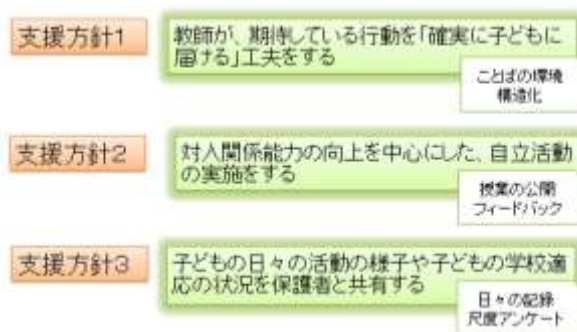
II 本学級の児童の特徴と支援方針及びその方法

本学級の児童のもつ特徴を行動観察やそれまでの個別の指導計画等を参考に児童に共通するものを右のようにまとめた(表1)。報告者は、「プラスのイメージ」と「陥りやすい傾向」は、表裏一体にあると考えている。つまり、教育効果を上げることができれば、プラスのイメージになり、教育効果が上がらず児童のもつセルフイメージが下がると「陥りやすい傾向」の姿を表出すると考える。

表1 本学級児童達の特徴

プラスのイメージ	陥りやすい傾向
素直に受け取る	言葉の背景の読みとりが苦手
丁寧な言葉遣い	心の距離を縮めにくい
大人とは親和関係	同世代との交流が苦手
定番に安心	随機応変は苦手
ホームでのびのび	公の場での緊張度は高い
ユニークな存在	ダークなイメージへ傾斜の恐れ
堅実さ	変更や訂正に時間が必要
変化に敏感	集中の継続や選択が苦手
一生懸命	優柔がきかない

表2 支援方針と内容



児童の特徴は、持味でもあり課題でもあるととらえる。そこで、今年度は、この課題を軽減するために3つの支援方針と内容を左のように計画した(表2)。これは、学級全体に実施することで、学級全体の底上げを図り、児童一人一人が本来もつ力を発揮し、学校適

応を向上させることを目的としている。

III 情緒学級での取組実際

1 支援方針1・・・教師が、期待している事柄を「確実に児童に届ける」工夫する

(1) ことばの環境（大切にしているという思いを届ける）

セルフイメージとは、自分自身をかけがえのない存在として認め、長所や短所、うまくいく自分や、失敗する自分もふくめ自分であり、そんな自分が好きである状態という考えのもと、「ことばの環境」を重視してきた。「ことばの環境」は、たくさんのほめられる経験、他者から認められる経験をもたらしものと考えている。「ふわふわことばを」いつもあたたかくふりそそぐことを自身の習慣になるように意識して実践を行った。

支援方針1

図3 ことばの環境

ことばの環境

「ふわふわことばを」いつもあたたかくふりそそぐ
感謝 ありがとう たすかるよ ごくろうさま
共感 それはいやだよね きつかったね
激励 だいじょうぶ！ そんなこともあるさ
勧誘 もう1回できるよ こうしてみたら やってみようか
謝罪 ごめんなさい 言い方が悪かったね
賞賛 すごいね やったね **やればできるね**
そう それでいいんだよ
とことん意識して実行する→なかなか難しいです

(2) 構造化（見通しを届ける）

「いつ」「どこで」「なにを」「どれくらい」「どのようにして」「いつまでに」「終わったら何をする」が分かると活動をスムーズに進められるという考えのもとに実践した。

① 時間の構造化

時間は、自分の位置を理解するものさしである。児童が、自分が生活している時間（1年間、1ヶ月、1週間、今日）を視覚的に認識できる工夫をした（図4）。

図4 時間の構造化



大きな時間の枠組みから、今日に至るまでを4つの段階で示すことにより、今は、1年のどのあたり、1ヶ月のどのあたり、1週間のどのあたりを意識させた。また、この流れが、児童の学校での1日の生活スケジュールにつながっていくことになる。

② 空間環境の構造化

刺激に対する弱さをもっている児童が多い。そのため、選択的集中や集中の継続に影響を及ぼしている。情緒学級の空間を低刺激化することで、学習への集中度を高めることができると考えた。下の写真は、情緒学級の様子である（図5）。

図5 教室の様子



左側の写真は、個人で学習するスペースである。低刺激化のために段ボールで作ったパーテーションを設置している。児童は、個人課題の学習をこのスペースで行う。右側の写真は、朝の会・給食・帰りの会等を行うスペースである。全員が輪になって座れるようにテーブルを設置し、ラウンドテーブル的な運営を行っている。

③ スケジュール

児童は、朝の会の後に交流学級の先生の元に赴き、その日のスケジュール確認するようにしている。各自が、小さなスケジュールボード（図5）を持ちその日の時間割を記入する。その後、教室にあるホワイトボードに教科カードをはり付ける（図6）。学習の終わりの場面で次の学習の確認をすることで、自分のスケジュールへの関心を高めるようにした。

図6 スケジュールボード



図7 ホワイトボード



④ 行事での取組

本学級の児童にとって、学校・学年行事は、不安をもたらすものである。個々によって要因は考えられるが、共通している不安の要因は、見通しがもてないこ

とにある。そこで、前年度行事記録写真や現地に取材に赴き、記録した写真を用いて、事前指導としてプレゼンテーション（以後 プレゼン）を行ったり、疑似体験を行ったりした。当日の児童の参加状況も落ち着いた様子で積極的に参加し活動する姿があった。

また、合同作品展でのプレゼンでは、「切符の買い方」の説明を行った。その後、「切符の買い方」を小冊子にまとめ児童に持たせた。児童は、当日その小冊子を参考にして、切符を購入するようにした（図8）。

表3 事前学習プレゼンテーション

学年	行事名	形態
1	入学式	疑似体験
3	社会科見学	プレゼン
4	環境科体験学習	プレゼン
	連合音楽会	プレゼン
5	自然教室	疑似体験
6	修学旅行	プレゼン
全体	合同作品展	プレゼン

図8 切符の買い方プレゼンと実際



- 2 支援方針 2・・・本学級の児童の学校適応を向上させるために、対人関係能力の向上を中心に自立活動を実施する。

(1) 授業の公開

情緒学級の児童は、交流学級での学習の時間が多い。そのため、全員が揃うのは、朝の会・給食・帰りの会である。そのため、自立活動（対人関係能力向上等の一斉指導学習）の時間の設定が難しい。そこで、授業公開する場を活用することで解決を試みた。表4は、今年度を実施した自立活動学習（一斉指導のみ）である。

更に、学習したこととして記録として教室に掲示していつでも振り返ることができるようにした（図9）。

表4 自立活動学習

時期	授業の場面	学習課題	学習形態
4月	授業参観	協力って何	体験型
6月	授業参観	聞き方名人	ゲーム型
7月	校内研修	イライラさよなら名人	体験型
9月	学級活動	みだしなみ名人	体験型
10月	2年次教諭研修	きけん脱出名人	RPG
11月	保健指導	手洗いうがい	体験型

図9 学習の記録



(2) フィードバック

帰りの会では、その日の振り返りの時間を大切にしたい。それは、人前で発表することの抵抗感や他の学年の友達の交流学習のことでお互いのがんばりを共有できる場にするためである。そのために、振り返り用のワークを作成した。左半分が、連絡や振り返り記述欄になり、右半分が宿題の一部になっている。ワーク（図10）

は、現在使用している4版目のものである。各ページの構成は、以下のようになっている。

図10 ワーク



左ページ

上段：連絡とその日の表情について
 中断：生活や身だしなみのチェック
 下段：学習自己評価と振り返り

右ページ

宿題（読書と自由学習）
 上段：読書、音読のコーナー
 指定された本を読む
 下段：自由学習コーナー
 日記、イラスト、パズル
 塗り絵など自由に活動

3 支援方針3・・・児童の日々の活動の様子や児童の学校適応の状況を保護者と共有する

(1) 日々の記録

ここでいう記録とは、学校生活で気になったことだけでなく、交流学习の様子や情緒学級での様子など写真記録とコメントを入れたノートを作成し、保護者に提供している。また、保護者からも児童の家庭での様子や特徴についても知らせていただき、児童の情報を学校と家庭とで共有し協働して教育に当たるようにした。

学校での学びを家庭教育でも生かせるように、1年生のサクランゴ計算についてその手順を示し家庭に提供（図11）した。

図11 連絡ノートとサクランゴ計算



道具も、教室にあるものと同じものを用意し家庭で活用してもらった。

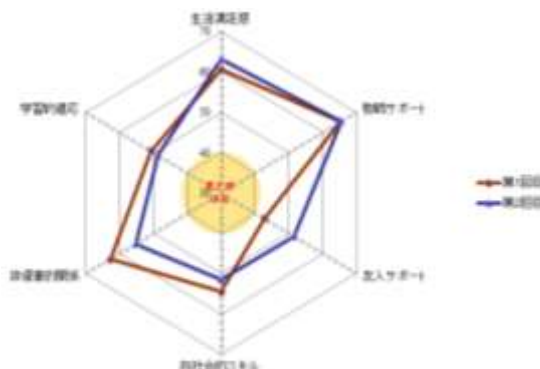
(2) 尺度アンケートの実施

児童の学校適応の様子は、児童の様子と家庭からの連絡によって実態を把握することが中心となっている。しかし、複雑化した社会においては、「教師の経験知や養われてきた勘」だけでは、把握が難しくなっていると考えている。そこに「データによるアセスメント」を加え、児童の学校適応のアセスメントを実施した。

アセスメントには、「学校適応感尺度『アセス』(栗原慎二、井上弥編集)」を活用した。

図12 アセスレーダーチャート

結果は、6つの観点からレーダーチャートに表示される(図12)。分析方法は、学校適応感尺度『アセス』を参考に行った。そして、個人懇談会の場で保護者に提示し、普段の児童の様子と併せて、児童の学校適応感の状況について共有を図った。



IV 情緒学級での取組の成果と課題

1 成果

(1) 支援方針1

- ① 「褒められる」よりも「感謝」「労い」のことに、児童の表情に満足感がうかがえた。人のもつ「社会的欲求」に応じたものであるからだと感じている。情緒学級が「居場所」として実感していることではないだろうか。
- ② スケジュール掲示するだけでなく、その都度確認することで、児童に次の学習に向かう心と物の準備を確実に実行できた。上級生は、自分で確認して行動に移すことができるようになっている。

(2) 支援方針2

- ① 対人関係能力向上の学習には、心理教育的援助サービスの一つである、SEL8-S(社会性と情動の学習 小学校編)を中心に実施した。子どもにとって学び易く、楽しく参加できる学習であり、その日から実践できるところによさがあった。また、対人関係の向上だけでなく、ストレスマネジメント教育や健康教育等広く対応できるように構成されているため授業公開でも、参観者の関心を高められた。
- ② 振り返りの場の設定は、時系列でものごとを捉えることが苦手な、情緒学級の児童達にとって、1日の学びを確認するよい時間となった。ワークに書くことで、時系列で試行を展開し、帰りの会の発表に生かすことがきている。

(3) 支援方針3

- ① 写真媒体ではあるが、その日の児童の様子を保護者に提供することができた。その様子を媒体にして、保護者と学校適応の状況を共有することができ、風通しのよい関係を構築する一助になった。
- ② データによるアセスメントによった、客観的に児童の状態を把握することができた。個人懇談会の場で活用でき、今後の児童への支援方針等を共有することに役立てられた。

2 課題

- (1) 支援方針1・・・児童の持ち味を学校生活で発揮させる心の基礎体力の向上
 - ① セルフイメージの向上に向けて、保護者にも啓発する工夫を行う。
 - ② 自立活動の学習のプログラムとして実施、児童にも気持ちのよい言葉をつかうことができる実践者として育てる。
 - ③ 教室環境の構造化についても、より児童にとって学びやすいものを求める。

- (2) 支援方針2・・・対人関係能力の向上による上手く社会と付き合う能力の育成
 - ① 心理教育的援助サービスの充実を図り、実践回数を増やす工夫を行う。
 - ② 朝の会、帰りの会を形骸化させない内容の工夫とワークの形態の工夫を行う。

- (3) 支援方針3・・・複数の尺度アンケートを活用した多角的なアセスメントの実施
 - ① 頻繁に更新することは難しいが、細く長くという意識で継続を図る。
 - ② 1年生～2年生も測定が可能なアセスメントを探し実施する。

V まとめ

児童の学校適応の向上として行った手立て（支援や援助）が、児童中心になっていたかを振り返り実施することが大切である。なぜなら、手立て（支援や援助）先行ではない。まずは、学校生活を送る児童の願いや思いに寄り添うことがまず大切であると思うからである。「この子のことをもっと知りたい、この子の思いをもっと知りたい。」という気持ちが第一ではないだろうか。その次に、手立て（支援や援助）になると考えている。学校生活（社会生活）は、楽しいことばかりではない。子どもが自分の力を十分に発揮できる教育環境の構築に向けて、今後も学校と保護者が協働的關係のもと有効な手立てを求め実践を行いたい。また、報告書にまとめるにあたって、ご理解とご協力いただいた学校、保護者の方・児童のみなさんに心より感謝申し上げます。

参考文献、資料、HP

文部科学省HP 厚生労働省HP 福岡県教育委員会HP 北九州市教育委員会HP

草加かがやき特別支援学校HP

担任のためのアドラー心理学

岩井俊憲

図書文化

よくわかる特別支援教育

湯浅恭正

ミネルヴァ書房

自閉症の人たちを支援するということ

朝日福祉ガイドブック

自閉症のひとたちへの援助システム

朝日福祉ガイドブック

学習障害（LD）及び周辺の子どもたち

尾崎洋一郎

同成社

プロカウンセラーの聞く技術

東山紘久

創元社

アセスの使い方

栗原慎二・井上弥 ほんの森出版

マズローの欲求5段階説

<http://ameblo.jp/parkour-358/entry-11308953741.html>